

会員数 61名 出席者47名・欠席者12名・免除会員4名
欠席者 麻田・天野・後藤・和泉享・小山・岸上・眞鍋・松山・中野昌・大西和
谷本・森一会員

前々回出席率 78.3% (8/1)

MARUGAME ROTARY CLUB WEEKLY

会 長 齋賀 護
幹 事 中川 清
会報委員長 和泉 清憲

お知らせ

- ・ 8月のプログラム
1 (No.1)-クラブフォーラム
8 (No.2)-夜間例会
15 (No.3)-休会
22 (No.4)-客話
29 (No.4)-クラブフォーラム
- ・ 他RC例会変更
丸亀東 8/13 休会
善通寺 8/14 休会
8/21→8/22 納涼例会
坂出東 8/14 休会
8/28 夜間例会
坂出 8/13 休会
8/20 夏季家族会
- ・ ニコニコBOX;なし
よいことがありました
秋山憲夫君
歓迎会ありがとうございました
山本君

<ニコニコ会計累積/¥59,000>

- ・ がんばるBOX;なし
出席できなくて
橘君
早退します
中野和男君 菅君
田村さんのお話を聞いて
齋賀君
席替えにご協力頂きありがとうございました
夏見君
前回の暑気払いで1,000円当たり
ました
藤井君
よいことがありました
川原君

<がんばる会計累積/¥77,000>

例
会
場
・
事
務
局丸
亀
市
塩
飽
町
48
|
1
丸
亀
プ
ラ
ザ
ビ
ル
5
F

■会長挨拶

洪野日向子さんが全英女子オープンで優勝されました。年に5回開催される女性のメジャートーナメントで日本人が優勝するのは、1977年に樋口久子さんが31歳で全米女子オープンに優勝してから42年ぶりのことです。洪野さんは1998年岡山市生まれ、小学校2年生の夏にゴルフと出会い、12月よりソフトボールを始めて(投手で左打ち)、岡山県ジュニアゴルフ選手権で2011年から3年連続優勝し、中学2年からゴルフ一本に絞ったそうです。父親は円盤投げ、母親は槍投げと、ともに陸上のフィールド競技選手です。

昨年プロテストに合格し、プロ一年目の今年、「サロンパスカップ」「資生堂オープン」と2勝。そして初めての海外遠征がメジャー大会での優勝となりました。海外で活躍された岡本綾子さんも宮里藍さんも届かなかったメジャー優勝、何が洪野さんと違っているのでしょうか。駄菓子を食べながらラウンド、観客にハイタッチ。個人競技であるが多くの人を味方にして自分の気持ちを乗せ、失敗を恐れず攻めの姿勢を貫き、体幹を生かしたスイングで、まるで「心技体」を自在にコントロールしているかのようです。これを機に、次なるメジャー制覇選手が現れることを期待せずにはられません。

■幹事報告

- ① 第57年度クラブ計画書が出来上がりました
- ② 地区会員増強・研修リーダーセミナーが8月17日に徳島で開催され出席してきました
- ③ 地区大会登録のご案内

■例会事業;客話;丸亀ドイツ兵俘虜研究会 田村慶三様

丸亀俘虜収容所に見る日独交流

Herzlichst Und Mitleidvollst Willkommen 『心から、大いに同情して歓迎します』ヨハネス＝パールトは、俘虜収容所(現・丸亀塩屋別院)に向かう道に掲げられた花飾りの看板のドイツ語を見て心が温まるのを感じた。時は今をさかのぼること約100年。1914(大正3)年に第一次世界大戦が起こると、日本は日英同盟を口実にドイツに宣戦し、中国におけるドイツの租借地、山東半島の青島(チンタオ)を攻撃した。その結果、ドイツ守備隊の将兵約5000人を捕虜とし、日本各地に設置した俘虜収容所に彼らを収容した。パールトを含む320余名のドイツ人将兵は丸亀に送られ、以後2年半、この地で俘虜生活を送ることになったのだ。

寺院の建物を利用した収容所は、すしづめ状態で寝なければならない窮屈さはあったものの、比較的自由な生活が許された。パールトも本堂の床下に木箱を積んで書斎を作り、読書に没頭したほどだ。有志たちによって楽団が結成され、演奏会も盛んに行われた。日課の中には散歩もあり、中津海岸まで出かけてサッカーを楽しんだ。その姿を地元の人々が間近に見て、俘虜たちを親しみを込めて「ドイツさん」と呼んだ。



2019.8.22
Vol.57
No7
(2765)

まさにドイツ人俘虜は人道的な扱いを受けたと言えるだろう。なぜ、このようなことが可能だったのか。

明治時代以来、日本はドイツを近代化の模範とし、法律・医学・軍事制度などさまざまなものを学んで来た。また、ドイツ人俘虜の中には、大戦前から中国や日本で商人や教師、技術者として働き、優れた技術や知識を持つ者が多かった。日本政府や軍部は、そのようなドイツ兵から積極的に技術や知識を学びとろうという方針を持っていた。さらに、当時の日本は、世界の国々から文明国として認められたいと願い、俘虜の虐待を禁じた国際法を厳格に遵守しようと努めた。冒頭に掲げた言葉も、このような時代背景の中で、ドイツ人俘虜を迎えるに当たって用いられたものである。俘虜生活の間、プロの音楽家だった二名の俘虜は、丸亀高等女学校で音楽教師たちを前にバイオリンの演奏を行った。また、俘虜たちが丸亀市内で材料を調達して製作した工作品などの展示会は、2日間の開催期間中に3万人もの観覧者を集めるほどの盛況ぶりであった。戦争中の敵対国ではあったが、相手を尊重し、相手から何かを学ぼうという気持ちがあることで、このような交流が生まれたのである。バールトは、その後一時本国に帰国したが、第二次大戦後は鎌倉に住んで日本文化を研究した。そして、1968(昭和43)年再び塩屋別院を訪れている。若き日に丸亀で過ごした俘虜生活に思いを馳せたことだろう。